

受難節第3主日礼拝 説教「思い起こせ、主の御心を」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2019年3月24日

イザヤ書 63章7～14節 ルカによる福音書 9章18～27節

イチローの引退会見をご覧になった方も多いことと思いますが、恐らく、この朝、多くの牧師たちが、このイチローの引退から説教を始めていることでしょう。そこで、そうした牧師の一人として、御言葉に聞きつつ思うことは、人というものは、その人生において、幾度となく終わりを迎えるものだということです。そして、その最後に置かれているものが、死という厳粛なる事実であり、それゆえ、その山あり谷ありの生涯の終着点は、死ということにもなるのでしょう。ただ、私たち信仰者は、その死をもって、人生の終着点とは考えません。こうして主を信じ、主と共に同じ命に生き、主と共に人生の旅路をなす私たちの目指すところは、主イエスが仰るように、神の国以外他にないからです。従って、私たちの人生を何かに例えるなら、同行二人ではありませんが、主と共に神の国を目指す巡礼の旅ということにもなるのでしょう。そして、そのことがはっきり知らされるのが、一つの終わりを迎えたときであり、中でも死というこの厳粛なる事実と向き合うその時です。

私たちは、その人生において、幾度、終わりを経験するのでしょうか。それと同時に、幾度、新たな始まりを経験するのでしょうか。そこで、一つの終わりと新たな始まりとを感謝をもって受け入れることができるなら、イチローではありませんが、「もう死んでもいい」と、人は喜んでそう思うこともできるのでしょう。けれども、次の段階へと進むことができず、また、進んだとしても、その新たな局面を喜んで受け入れることができ

なければ、その時、イチローのように、「もう死んでもいい」などと思えるのでしょうか。恐らく、その時、口から出て出てくる言葉は、「死んでしまいたい」、「消えてなくなりたい」、それが、人の世の常なのではないでしょうか。ただ、一つお断りをすれば、このイチローの「もう死んでもいい」との一言は、自らの成功体験におもねったものではありません。大きな結果を残したイチローがありますが、ご本人も語るように、輝かしい数々の記録は、彼自身にとっては、大きなことではありませんでした。では、いかなる思いが彼をしてこう語らせたのか。そこで、引退会見でのこの彼の言葉の真意を考えると、今日の主イエスの言葉に重ね合わせて聞いていくことができるように思います。

彼のこれまでの野球人生は、彼が、野球という自らの十字架を負いつつ、その長い現役生活を過ごしてきたということです。そして、それは、彼が言うように、彼が野球を愛してきたということです。ですから、このことは、主イエスが仰る「自分を捨てて、日々、自分の十字架を背負って、私に従いなさい」というこの言葉と重ね合わせて考えることができるように思います。つまり、日々、野球を愛し、まさに野球という競技の伝道師として歩み続け、そして、その彼が数々の輝かしい偉業を達成することができたのは、彼が野球への愛を貫き通すことができたからです。ですから、主イエスが仰る愛を貫くことの貴さを、私たちは、この一人の偉大なる人物を通し、知らされているように思います。それゆえにまた、

愛という言葉、意味をイチロー以上に
よく知っている私たちは、彼以上にこの
愛を貫き通さなければならないのです。
つまり、日々、主イエスへの愛を我が事
として受け止め、その愛に根ざし、その
愛を現していくこと、それが、十字架を
背負い、主イエスに従うということであ
り、そして、この愛ゆえにまた、私たち
も、終わりを終わりとして、感謝をもっ
て、受け入れることにもなるのです。

それゆえ、この愛するということは、
私たちに結果を求めます。ただ、そこで
求められることは、私たちが愛というこ
の言葉を多用することでもなく、また、
ありがたがることでもありません。イチ
ローのように結果を残すことであり、そ
れが、自分の十字架を負うと言うことで
もあるのでしょうか。ただ、それができ
ばいいのですが、結果を残すことができ
ないとき、そして、それは、ただありが
たがり、言葉を多用するだけで、やった
ことがなければ当然なのですが、多用さ
れてきたこの愛という言葉をもって、私
たちは、人を責め、また、自分をも責め
ることにもなるのでしょうか。どうしてな
んだ、こんなはずじゃなかった、おかし
いだろう、そういうことです。そして、
私たちが、そうしたことを我が事として
間近に感じるのが、一つの終わりを迎え
たときです。それは、愛が破れたと、そ
の時、私たちはそう思うからです。また、
それだけに、日々の繰り返しの中で、そ
の実践が問われ、また求められもするの
です。

ですから、自分を捨て、己が十字架を
負い、主イエスにお従いする生涯を私た
ちが過ごすことができれば、私たちの多
くは、イチローのように、もう死んでも
いい、との素直な思いをもって、まさに、
最期を最期として、喜びと感謝の中に迎
えることにもなるのでしょうか。従って、

イチローは、恐らく、彼の今後の人生が
いかなるものであるのかは分かりません
が、その輝かしい業績にふさわしく、今
後の人生を歩んでいくように思います。
けれども、私たちはどうでしょうか。こ
の時、彼への賞賛を惜しむものではありません
が、彼の姿を自らに置き換える時、
この己が十字架を負い、主イエスに従う
ということ、つまり、自分が主イエスの
愛にふさわしく生きたか否かを考える
とき、はたして、どれだけの人々が、自信
を持って愛に生きたと口にすることがで
きるのでしょうか。ですから、そのよう
な思いをもって、改めて、一つの終わ
りを迎えたイチローを見つめるとき、彼
への賞賛と感謝は、そのままの姿を保つ
ことはできません。賞賛は落胆へと、また、
彼への感謝は、自らを卑下する思いへと
置き換わってしまうことにもなるのでし
ょう。それは、私たちの多くが、彼のよ
うに才能に恵まれてもいなければ、彼の
ように日々努力し続ける力もないからで
す。まただから、私たちも、世の人々も、
彼の偉業に対し、惜しみない賞賛を与
えるのでしょうか、では、主イエスに対
してはどうなのでしょう。

主イエスへの惜しみない賞賛、感謝、
私たちがこの言葉を口にするとき、私た
ちの眼差しの中には、主イエスの姿がし
っかりと映し出されていることでしょう。
それは、主イエスの偉業を知らされるか
らであり、そして、そこに現されている
ものが、主イエスの愛でもあるからです。
けれども、その一方で、私たちは、主イ
エスの目に映し出される自らの姿を見て
何を思えばいいのでしょうか。それが、
もし、愛という言葉だけを多用し、実際
には、主の十字架の愛からほど遠い現実
に生きるだけだとしたら、主イエスに向
かい語るその賞賛、感謝の言葉を、私た
ちは同じように口にすることができるの
でしょうか。仮に、もし、できたとして、

では、傍目には、その姿はどのように映るのでしょうか。自分では気がつかないその姿を、人は敏感に気づくものです。また、そうした人の姿を見て、なにがしかの思いを抱いたその人たちが、同じように主イエスの中に自らの姿を見つめるときに、今度は、自分自身をどのように受け止めることになるのでしょうか。そこで、互いの醜さを知らされ、傷ついた者同士が互いに互いをいくら慰め合ったところで何かが変わることはありません。その一瞬、お互いの欠けの多さを事実として共有し、一緒だねと、そこで安心し、そうして、その時をうまくやり過ごし、仮にその先に進むことができ、それ以後、主イエスに近づこうともせず、安穩と過ごすことができたとしても、私たちの人生の最後に、今度は、主イエスの方から私たちに近づかれるのです。では、その時、私たちは、主イエスに対し、どんな言葉を投げかければいいのでしょうか。また、投げかけることができるのでしょうか。そして、その時の主イエスの姿を、私たちは、どのように見つめることになるのでしょうか。

こうして御言葉に聞きつつ歩んだ私たちが、一つの終わりと向き合い、その時、率直に思うことは、もしかしたら、すべてを知らされていないがゆえのもどかしさ、つまり、分からないという思いなのかもしれません。けれども、分からない中で、また、新たにされることは、御言葉を通し、主と共に歩んだその生涯は、悪いものではないということです。それどころか、これで良かったのだと、そう思えるのが、主と共に生きる私たちの生涯なのではないでしょうか。私は、1月、ある一人の信徒の方を天にお送りし、その方との別れを経験する中で、このことを知らされたように思います。その方は、藤沢教会で受洗し、前任地の佐倉教会の役員として、教会を支えてくださった方

でありました。そして、二十年以上前に癌を患い、その時からずっと末期癌と言われ続け、その間、医者からは、何度あとも一年と言われたか分かりません。けれども、そうした中で、病気と向き合いながら、教会生活を過ごし、役員として教会を支えてこられたのです。私は、その方と十年ほどをご一緒させていただいたのですが、会堂建築もあって、牧師として本当に辛い時期にも、その方には本当に支えていただきました。また、だからということではありませんが、その方に時折言われたことは、私の最後は頼みますよ、ということでした。ですから、はい分かりました。任せてください、とそう返事をしたのですが、残念ながら、その思いに応えることなく、離任することになったのです。

そして、藤沢に参りまして、約3年近くが過ぎた年明けのことです。前任地の信徒より、ホスピスに入ったので、見舞って欲しいという連絡をいただきました。そこで、家内と二人で病室を訪ねたのですが、私に会うなりその方が仰ったことは、「詐欺師、騙された」というこの一言でした。ただ、その方は、人が聞いたらなんと思うか分からないこの言葉を、にっこり微笑み、嬉しそうに、私に向かってそう仰ったのです。そして、その傍らにいた奥様も、嬉しそうにやさしく、「これで思い残すことはないわね」とそう仰ったのです。そして、このやり取りの中で、私もとてもうれしく思ったのですが、その四日後、その方は、主の御許へと静かに召されることになったのです。ただ、その日は、主が復活された日曜日でもありました。私は、その方が召されたことを知らないまま、もう一度感謝の言葉をお伝えしたく、夜、病室を訪ねたのですが、残念ながら、直接、感謝をお伝えすることは許されませんでした。けれども、主が復活された日、その方の最

後の姿は、微笑み、口にした「詐欺師、騙された」と仰ったそのままの姿でありました。そして、思ったのです。聖書が私たちに伝える御心の真実を、終わりを終わりとして迎えるしかないその生涯の最期を主がどのように見つめておられるのかを、そこで、改めて知らしめられたように思うのです。

人に終わりを定めたのは神様であり、それゆえ、人は、終わりを必要以上に避ける必要はありません。ただ、その一方で、私たちの多くは、終わりを嘆き、避けようとしてしまう。イチローのように、もうこれでいいとは思えず、そして、イチローと比べ、嘆くのです。それゆえ、私も、終わりを終わりとして受け止めることができずに、嘆くことが多いように思います。それゆえ、その矛先は、時に神へと向かうこともあります。ですから、そうした私の姿は、神に敵対しているとは思えないことでしょう。しかし、神は、そうした人の嘆きを自らに敵対しているとは思えません。「神からのメシアです」と主イエスに対する正しい認識を示しながら、けれども、終わりを終わりとして受け止められず、主を呪い、神を呪い、自らを呪い、嘆いたペトロのことを、主はどのような眼差しで見つめておられたのでしょうか。そこに、神と主イエスの愛が現されているのは明らかです。ただし、私たちは、この愛に溺れ、流されるだけで終わってしまっただけではないのです。

神を呪い、自らを嘆くしかない私たちは、主というこの言葉から人生を問い直し、その命を見つめ直すとき、私たちの向かい行くところがどこなのかを、私たちは、知らされるのです。それが、神の国と言うことなのですが、しかし、私たちには、その全貌が明らかにされているわけではありません。分からないのです。

けれども、分からないからこそ、私たちは、終わりを終わりとして、穏やかな笑みをもって受け止めることができるのです。なぜなら、私たちの人生は、その全貌がすべて明らかにされ、すべてが分からずとも、主イエスは、私たちと共にいてくださっているのです。それが、主イエスの人生であり、それが私たちの人生でもあるからです。ですから、この主イエスの生涯を同じように歩む私たちの人生は、分かっているにもかかわらず、主イエスが私たちの人生を共にしていることだけを受け入れることができるなら、そこで発せられる最後の言葉が、どれだけ人を驚かせるものであっても、そこには、私たちにはすべてが分からないがゆえの平安が満ちあふれることになるのです。そして、それは、そう受け止めることのできる人々だけに与えられる喜びではありません。この事実を受け入れ、感謝する者が、悲しむ人々、苦しむ人々、つまり、世の人々のその傍らにすることができるなら、主と共にいます幸いを信じる私たちの生涯も、また、その私たちの傍らにある人々の生涯も、主イエスゆえに、感謝と喜びをもって、受け止められることになるのです。つまり、私たちの能力や努力する力の問題ではなく、このように主イエスゆえの幸いを分かち合うことが許されているのが、こうして主を信じる私たちであり、だから、私たちは、その人生において、何度終わりを経験し、嘆こうとも、誰もが向かい行く終着点に共に手を携えて、進み行くことになるのです。ですから、そのような交わりへとすべての命を招いてくださっている主に感謝し、また新たな歩みへと一緒に進み行くものでありたいと思います。

祈り